

## 象牙の塔を出る

吉本みほ

一体何度時計と駅の外を見比べて、いらいらと歩き回ったことだろうか。「もういいですよ」と言って気を遣うユキを、それでもなだめて待ち続けた甲斐もなく、最終便の出発時刻があと十分に差し迫っても、とうとう彼は来なかった。

「本当に、一体どんな神経してるのかしら。これだから研究者は嫌いよ。」

橘薫は忌々し気に額の髪を掻き揚げて、自分を見上げているユキにそっと笑いかけた。ユキは僅かに口を開けたが、結局何も言わないまま、小さく首を横に振る。

薫の目に映るユキは、感情表現こそ拙いけれども、穏やかで優しい娘だ。街に溢れる女子高校生の、あの不愉快な「マナーのなってなさ」に比べれば、彼女はいつそ天使のようだった。

そう。彼女は哀れな天使なのだ。

これからユキに降りかかるであろう悲惨な現実を思うと、薫は彼女が不憫でたまらない。いや、本当に哀れなのは、彼女がその現実を冷静に受け止めていることの方だろう。彼女は悲しむことすらまだおぼつかないのだ。

「橘さん、いいんです。私は大丈夫ですから。」

その言葉に、どんな返事を返せばよいのかも分からず、薫は彼女の肩を抱いて最終便が来るのを待った。人目に付かないようにという配慮からの長く分厚い外套も、ユキの肩の細さを隠してはくれない。触れてみると改めてわかる。それは本当に頼りなく幼いかたちをしているのだ。

駅の時計の秒針がピシリと十一時を指すのを待っていたかのように、電車がホームに入ってきて、二人の姿を眩しく照らし出す。

ふと、薫は高校時代の世界史の授業を思い出した。アウシュビッツ強制収容所といったか、大昔に起こった世界大戦の惨劇の一つで、ユダヤ人の大量殺戮が行われたというアレだ。大勢のユダヤ人が貨物列車に押し込まれ、収容所に運ばれていったという例のアレ。ユキと迫りくる電車に微かな既視感を感じるのはそのためかもしれない。学生の時、アウシュビッツでの出来事を初めて耳にした時の、あの少なからぬ衝撃が、今になって再び呼び起こされる。それは非人道的行為に対する良心の呵責と、正義感を伴う怒りだ。

怒りは急速に冷めていき、代わりに顔を覆いたくなるような情けなさに苛まれた。

こんなことがしたかったんじゃない。

薫はユキに謝りたいという衝動を必死に堪える。おそらくユキは薫を許すだろうし、そもそも責任があるとも思っていないだろう。しかし、今ここでそれをやってしまうことが、どんなに卑怯で無責任なことか、そのこともよく分かっている。たとえ不甲斐な

かろうと、決して責任逃れはすまいと心に決めていた。

ただ、もしもこの場に彼がいてくれたなら。そう思うことだけは、どうしても止めることができなかった。

\*

研究室へ続く廊下を、カツカツ靴を鳴り響かせながら、柏木は歩いていく。腕時計で時刻を確認すると、現在午後十一時二十分である。

肩を怒らせて歩く彼を、もはや誰も咎めようとはしない。時刻が時刻なだけあって人影はまばらだったし、音を立てて勢いよく歩くのは彼の平生だったのだ。

柏木の目指す研究室には「水谷桂」というナンバープレートが掛かっており、さらにその横に「在室」の札がぶら下がっていた。若き天才生物学者、水谷教授。彼はこんな大切な日にさえここから動こうともしない。柏木は怒りに任せてドアを思い切り開けた。飼育している動物たちは怯えてしまうかもしれないが、そんなことは二の次である。

「先生、水谷先生。いらっしやいますね。むしろなんでいらっしやるんです。橘さんにあんなに強く言われていたじゃないですか。」

開口一番、柏木はきつい口調で自分の師を責め立てた。

研究室には一人の青年が、小動物飼育用ゲージの前で蹲っていた。幼さの僅かに残るその横顔にはおよそ似つかわしくない、いっそ汚らしいほど年季の入った白衣を身に着けている。彼こそが、新進気鋭の天才生物学者と名高い、水谷桂教授だ。

彼の類まれなる経歴を、この道を志した者なら一度は耳にしたことがあるはずだ。日本でも導入されて久しい飛び級制度を駆使し、一気に大学院の博士課程を終え、その能力を買われてここにやってきた。

ここは政府直轄の生物管理局。いや、正確に言えばその亜種である。本来ならば生物種の維持や管理、作物の品種改良などを目的とする機関なのだが、彼が配属された場所はより内部の、万全なセキュリティを施されたところにある。ここでは生物に対してさらに積極的なアプローチをする、分かりやすく言えば、生物の遺伝子を組み替えて新種を生み出したり、異種どうしを交配させて実用化もしくは実験の材料にするための研究が行われたりする。

なぜ堅固なセキュリティに守られているかといえば、法律に抵触する恐れがあるからだ。品種改良とはワケが違う。そもそも生物の創造などといった大それたことが、そううまくいくはずがないではないか。見るも無残な異形の獣たちや、試験管の中で細胞分裂を繰り返す大型動物たち。そんなものがひしめき合っている場所が、公然と容認されるような事態が起こるとすれば、それこそ世も末というものだ。

それにもう一つ。実験の対象に人間が含まれていることが挙げられる。これは決して知られてはいけない事実だ。たとえ、すでに民間の企業の間では、人間の培養と実験が行っていたとしても。政府がそれをやることは許されない。

さて、水谷桂のその後についてももう少し触れておこう。今から五年前、彼がここに

配属された最初の年で、ちょうど二十歳の時のことである。彼は半年間、ある教授のもとで研究員として過ごしながら、一つの目覚ましい功績を挙げた。彼には専用の研究室が与えられ、研究を妨げていた多くの制約の解除が認められた。教授という肩書は、じつはこのとき一緒に与えられたものだった。

柏木が彼の下を訪ねたのは三年前、研修生として見学に行ったのが最初である。この教授を「教授」と呼ぶにはあまりにも若く、僅か二歳しか年の変わらない彼にひどく敵愾心を感じたことを覚えていた。当時の柏木にとって、彼の立ち位置はまさに雲の上だった。彼はさながら雲上人だったのだ。

柏木はほかにもさまざまな研究室を見学に行っていた。そこで、彼はことごとく打ちのめされて逃げ帰ってきた。どの教授の研究の姿勢にも自分とは相容れないものを感じたのだ。徹頭徹尾、生き物に手を加え続けることをやめない冷静さ。目的のためには、幾多の実験体を「消費」することも全く厭わない無機質な熱意。それを才能だというのなら、自分はいわゆる「成せない器」なのだ。そう思うようになっていた。

しかし、水谷教授の研究室を訪れ、実際に彼を見たとき、そんな劣等感に似た焦燥はどこかに吹き飛んでしまった。

そこは小さなジャングルだった。

机や棚は確かに見えるが、野放図に繁茂した蔓性植物や低木の数々が、その上から覆い被さっている。植木鉢には収まりきらず、大量の土が床にあふれ出て、貧相ながらも木の根がのぞき、下草までもがうっすらと芽吹いているのが見える。

鳥の鳴き声につられて視線を上げれば、今の時期には見られない渡り鳥が、巢の中で雛を育てているところだった。何やら強烈な違和感を感じる。鳥たちのさらに向こう側、本来ならば空が広がっているはずの空間から見えるのは、まぎれもなくごく普通の天井で、蛍光灯の白い光が、木の葉の隙間から、木漏れ日のように降り注いでいるのだった。ここは確かに室内なのである。

水谷は、小さなデスクの上に突っ伏して、目に酷い隈を作って居眠りをしていた。彼の丸くなった背中の上では、毛並みの悪い、なんともみずぼらしい猫がちよこんと座って、こちらを見つめている。

彼はその様子を見て、水谷を師事することを決めた。「この人はマトモな人だ。」と直感がそう告げるのを、確かに聞いたのだ。

師事して三年がたっても、未だに何故あのかき彼をまともだと感じたのかは分からない。後でわかったことだが、彼はれっきとしたマッドサイエンティストであったし、それにはほかの教授でさえも眉根を寄せるほどだという。

彼のやり方には倫理観の欠片も見受けられない、とは一体誰の言葉だったか。水谷は自分の手で生き物を作り出すことを何よりの喜びと感じている節がある。傍から見れば、

それは創造という強大な力にあてられた狂気、またお気に入りのおもちゃを与えられて無邪気に喜ぶ子供のような純粹さとも取れる。どちらに転んだとしても、その発想には、人間に必要な決定的な何か欠けていると言わざるを得ない。それに、彼は決して動物たちを処分しない。作る前に重大な欠陥が判明してなお、生み出すことに躊躇いが無い。そのくせ決して殺さない。たとえその生き物が苦しもうとも、楽に死なせるようなことはしないのだ。彼の研究室は、今や欠陥だらけの動植物たちがひしめき合う動物園のような有様になっていた。

ほかの教授が彼の方針を非難する理由も、柏木には納得できた。確かに彼のやり方は、生命を全うさせるという道徳的な倫理観では収まりきらない苦痛を、生き物たちに強いっている。三年間も助手として一番間近で現場を見てきたのだ。その様子は、いっそ殺した方がまだましだと言いたくなるほど無慈悲で、惨たらしい。

水谷は突然やってきた柏木を一瞥しただけで、すぐに手元のゲージに向き直る。中に入っているのはハツカネズミをベースにしたキメラマウスだ。彼はネズミの健康状態を確認していたらしい。その能天気さに、柏木は苛立ちをますます増幅させる。

「先生、聞いてますか？ユキちゃんですよ。もう終電も行っちゃったんですよ。」

水谷はしかし、普段と何一つ変わらない様子で生き物たちの世話を続ける。ネズミの次は猫。犬、サル、鳥、蛇と続いてその他もろもろ。動物園の飼育員も真っ青になるほどの世話焼きぶりである。その様子は没頭しているといっても過言ではない。

ユキが哀れで、それが悔しくて、柏木はなおも水谷に訴えかけた。

「先生、あんなに大切に世話していたじゃないですか。どうして急に切り捨てるようなことしたんです。これじゃああんまりユキちゃんがかわいそうだ。」

「かわいそうって、何が。」

「何もかもですよ。せっかくここでまともに暮らしていたのに、実験施設なんか連れていかれてしまって…。あの子は先生に裏切られたも同然だ。きっと今頃悲しんでいますよ。」

水谷の返事はそっけない。冷たいというよりも、何の関心も抱いていないような調子だ。

「俺は何も裏切ってない。そもそも約束なんかしてない。だってそうだから。あの子もきつとそう言うさ。」

それでも、と柏木は唇を噛む。彼がユキに対して行った仕打ちはひどいものだった。そんな詭弁は言い逃れに過ぎない。ユキが何も言わないのをいように利用しているだけではないか。

口からついて出そうになるいくつもの不満は、しかし寸でところで言葉にはならなかった。続けて言った水谷の、ぼつりとこぼした一言に、思いがけず熱を奪われてしまったからだった。

「それに、お前はここでの生活をまともだというけれど、もし本気でそう言っているんなら、俺はお前の感性こそどうかしてると思うがね。」

ゲージに添えられた水谷の手はとても繊細な表情をしている。しかし彼のネズミに対するまなざしが、柏木にはよくわからないのだ。そして、それはユキに対しても同様だ。そんなに大切にしているのなら、わざわざ手を加えなければいいのに。手放さなければいいのに。最初から、そんなふうに接しなければいいのに。

そう思わずにはいられなかった。

柏木は、ため息をついて手近な椅子に座り、今日一日の動物たちの観察結果に目を通した。自分の書いた文字はひどく乱れている。ユキのことが頭から離れず、何も手に着かなかったことが一目でわかる。対して、水谷の文字は普段通りに淀みない。むしろいつもより丁寧に書かれているのではなからうか。

やはり自分には、先生の考えていることはよく分からない。

彼のことを薄情で冷酷な人物だと思っ反面、そんなふうに言うことを躊躇うときもある。水谷の人物像は、三年たった今でも、柏木の中で確定させることができないでいた。

詰めていた息を吐き出すと、その雰囲気悪さのためか、今度は水谷の方から話を切り出した。彼の表情は少し呆れている。

「さつきからため息ばかりついてるな。そんなにきたかったなら、俺に義理立てしなくたって、お前だけでも見送りに行けばよかっただろ。」

「そういう問題じゃないです。」

「あ、そう。」

人の心の分からないやつめ。そう罵ってやりたい気持ちもある。だが、なぜだかその言葉がブーメランのように、そっくりそのままこちらに返ってくるような気もして、結局柏木はただただむっつりしていた。眉間に皺を寄せている間にも、チラチラと頭に思い浮かんでくるのは、ユキの物言わぬ頼りない後ろ姿ばかりだ。そう、柏木が見ていた彼女のほとんどは後ろ姿だった。背中に目を引くシロモノがくつついていたことを差しおいても、自分と彼女はずっとそういう距離を保っていた。

彼女はいつだって水谷を見ていた。その視線に込められた意味を、もはや推し量ることとはできない。ただ、柏木はそのままなざしが好きだった。水谷を羨ましく思うほど好きだったのだ。何か、どんなことでもいいから、ユキの力になってやろうと思っていた。しかし、今となってはそれもはや叶わない。

「お前もう帰れよ。何をしたって手につかないんだろ。一日ゆっくり寝て頭を冷やせ。」彼の言葉に柏木は頭を振る。本当は少し疲れていたのだが、無性に意地を張っていたかった。

「少しだけ仮眠させてください。ちょっと寝たら、ちゃんと集中しますから。ここで終わったら記録が中途半端になっちまいますよ。」

一拍の間をおいて、水谷は「それなら好きにしろ。」と言った。こういうことを深く言及しないところに、自分は時々甘えて我儘を言ってしまう。改善すべき悪癖だという自覚はある。ただ今はそれが素直にありがたい。

研究室で夜を明かすことが頻繁にあるので、それに応じるように仮眠スペースもしっかり確保してある。カーテンで区切られたスペースの中に入り、薄い布団に身を横たえながら、柏木はぼつりと独り言を言った。

「ユキちゃん、今頃寂しい思いをしているのかなあ。」

独り言なので、もちろん水谷の返事は返ってこなかった。

\*

穏やかな呼吸音が微かに聞こえ始める。どうやら彼は本当に眠ってしまったようだ。ーやっと静かになった。

水谷はカーテンの向こう側で眠る助手にチラリと視線を投げかける。

柏木は悪い奴ではないのだが、感情の起伏が激しい分、ときどきああやって自分の気持ちを持って余すことがある。悪いことじゃない、それは悪いことじゃないけれど、彼はふとした時に生き辛そうな顔をする。

彼がこの研究室に初めて来たときも、ちょうどそういう顔をしていた。居場所を失って困り果てた顔。その表情が似ているなど、なんとなく水谷は思ったのだった。

だから彼を助手にしようと思った。ほかの頭の切れそうな、瞳を輝かせた研修生ではなく、歪んだ環境に身を置かざるを得なくなつて、自身の体の扱いにすら戸惑っているような、異形の獣たちにどことなく似ている彼を選んだ。

水谷は、ゲージから視線を上げて、長時間丸めていた腰を伸ばす。癖になつてしまつた猫背は、観察のために身を屈める機会が多いことも相まって、よけいに腰に負担がかかる。伸ばすときには大袈裟なくらいの音がバキバキと鳴り、そう遠くない将来の自分の腰が早くも思いやられる。

一匹の猫が、音もなく水谷の肩に飛び乗ってきた。貧相でみすぼらしく、歳を取つた三毛猫は、肩まで飛び上がることさえひどく億劫な様子で、眠たげに目を細めて喉を鳴らした。猫の耳の後ろを搔いてやりながら、ダニに負けて毛が抜け落ちていないか確認する。

猫に名前はない。柏木や薫が気まぐれに「ミケ」とか「タマ」とか呼んでいるが、水谷自身はこの猫のことを「おまえ」としか呼んだことがない。実験体に愛称をつけることは自分の首を絞めるようなものだ、かつて半年間だけ師事していたある教授が言っていた。その言葉を真に受けたわけではないけれど、以来水谷自身も動物に名前を与えて呼ぼうとは思わなかった。

この猫は、水谷が高校生の時に、授業で作つた初めての動物である。当時通つていた名門私立高校の売りは、「最先端技術を、実践形式で学ぶ」こと。多感な思春期の青年に試験管で動物を培養させることが、生命倫理の観点からすればどんなに愚かしいことであるかなど、そんなことを気にする学生がいるはずはない。かくいう彼自身も、そんな懸念は頭を掠りもしなかった。

実際に培養を行つて、出来上がった猫がこれだ。この猫は、クラスメイトのどの作品よりもお粗末な出来栄えだった。体は小さく鳴き声も弱々しい。おまけに骨格にも異常

が見られる。詳しい検査をすると、どうやら免疫機能にも不具合があるという。彼は目も当てられないほど悲惨な生き物を創り出してしまったのだ。

しかしこの結果は必然だった。彼はその作成において、重要な手順を踏まなかったのだから。ルールを破って、クラスメイトの作品との対照実験を行おうと考えたのである。

先生も他のクラスメイトも、彼の不注意を軽く笑い、あっさり流してしまった。

「水谷君ともあろう人が。」

先生は気にするなどとも言いたげに肩を叩いたのだった。誰もが、彼のしでかしたことについて、非難めいたことを口にしなかった。そのときは自分のことながらひどく意外に感じたが、猫たちが殺処分されることになっていたのを知って納得した。「実験だからね。そういう失敗はある程度は仕方ないと割り切るものさ。それに結果がどうあれ、最終的には処分されてしまう。あまり苦しまずに済んで良しとするしかないよ。」先生はまだ幼い彼にそう言って微笑み、慰めた。

彼は、そのときの先生の笑った顔を今でも思い出すことができないでいる。

水谷が引き取って世話をするのを申し出たので、結局あのできそこないの猫は処分されなかった。失敗作の実験体を生きながらえさせることの方が、皮肉にも人々の顔を怪訝にした。理解できない、かわいそうだと、友達も口々に水谷を責めた。

そうかもしれない。水谷も思った。自分はこの猫にとって、一番辛い選択をしているのかもしれない。きっとそうなのだ。周りがこんなにも非難するのだから。

水谷は椅子に深く腰掛けて、猫を膝の上に移動させてやる。猫は低く喉を鳴らしながら、膝の上で体を落ち着かせる場所を探してもぞもぞする。その様子は普通の猫と何ら変わらない。しかしこの猫には、これまでに何度も体を弄って度重なる投薬を行ってきた。そもそも出生からして真つ当な生き物とは言えまい。分かっているのだ。これが生命に対する冒瀆であることなど。水谷も、ほかの研究者たちも、そんなことは初めから分かっている。むしろ、だからこそ、周りは動物を殺処分しない彼を放っておかないだろう。

殺さないのは良心からではない。そんなものがあるのならば、この根本的に間違っている現在の状況すら許されるはずがないのだから。だからこれは断じて良心ではない。

生かしておくのも殺してしまうのも、こちらのエゴには変わりない。それなら好きにやってもいいだろう。自分を止める権利など、本当は好き勝手にやるようになる前から、誰も持ち合わせてなどいないのだ。

目を閉じていると学生だった頃のことを思い出す。

生き物を作るといふ、神様にでもなった気分でひどく浮かれていたあの頃。

初めて作った失敗作の猫。

笑って猫を殺すと言った先生の顔と、引き取った時の怪訝そうな顔。

それらの懐かしい記憶の果てに、水谷の今がある。

そして彼女がいる。ほかの例に漏れず、彼女もまた、それらの上に立っているのだ。

目を開けて柏木の持っていた書類を眺める。対照的な二つの筆跡が、お互いの精神性のメタファーのようで面白い。やはり柏木を助手に選んでよかった。彼のような人間が、自分たちには必要だったのだ。彼の素朴な怒りや悲しみは、感覚の麻痺した自分や、世界を知らない彼女や、冷たい使命感に囚われた研究者たちには身に染みるものであった。「まとも」な感性といえ、もう一人、それを自負する人物がいる。その人物とは、同時に今一番水谷がコンタクトを取りたくない人物でもあった。

彼女の言いそうなことには大方の見当がつく。どんなに棘を含んだ言い方をされるのかも。しかし、柏木からも注意されてしまったように、避けては通れない相手だった。

水谷は、僅かな逡巡のあとに、橘薫へと電話を掛けた。今更電話したところで、もう出てすらくれない可能性もある。願ったり叶ったりだ。そうだとしたら、どんなにありがたいことか。

呼び出し中のコール音が鳴りだした。静かだが常に意識の片隅にある、耳の底にこびりついた苦しそうな獣たちの吐息すら、この瞬間ばかりは規則的な電子音にかき消され、意識の外側に追いやられていた。その音はやけに耳に痛かった。

\*

薫が初めてユキと出会った年。それはそのまま初めて水谷と出会った年でもある。薫は研究者ではない。もともとは医者として働いていた。某大病院で教授職を与えられていたのだが、急に上からの通達で現在の職場に飛ばされた。

はじめはその意図を理解できなかった。自分と生命科学と、共通点は皆無だ。モルモットの診察でもさせられるのだろうか。しかしいくら医師とはいえ、動物の診察はできない。それなら獣医のほうが適任である。

しかし、薫のもとへ運ばれてくるのは紛れもなく人間だった。それも、まるで虐待を受けたような傷を負ったものや、劇薬と思われる痛ましい症状をもつものばかり。彼らの抱える症状はすべて人為的なものだった。この場所と、人権を奪われているかのような人々の様子を鑑みれば、薫にも自分の置かれた状況が容易に理解できてしまう。

彼らは人体実験の被害者だ。そして自分は彼ら専用の医師になってしまったのだ。

何ということだろう。人を救うために医師になったのに、自分のやっていることは何だ。僅かな延命によって苦しみを引き伸ばしているだけではないか。

悔やんでももう遅かった。手を引こうと思ったときには多くのことを知りすぎていた。それに、たとえ無意味な延命措置だとしても、それでも、人が傷つく姿を黙って見過ごせるはずもない。そういう意味では、薫は骨の髄まで「医者」だったのだ。

そんな生き地獄のような生活を何年も送ってきたある年のことだ。珍しく、傷のない「患者」を診察した。まだあどけない面影の残る研修生が、彼女に付き添っていた。その組み合わせの不思議さに、

「あなたはこういう立場なの？教授に言われてここへ？」

と問うた。すると彼は首を振るのだ。

「いえ。俺の研究なんです。今、薬物で身体を慣らしているんで、どういう具合か直接



聞こうと思って。」

こともなげにそう言っただけの青年を、開いた口がふさがらない思いで見つめたものだった。研究者とはそろってこんな調子なのだろうか。こんなに若い、あどけない青年でさえも。

こんな若者に人の命を預けるなんて。この青年の教授はずいぶん傲慢で無責任なものだと、無性に腹が立った。「患者」である少女のがらんだ目と、研究者である青年の冷静なまなざしは、薫をひどく虚しい気持ちにした。どんな言葉をもってしても、彼らに自分の気持ちに正確に伝わるとは思えない。彼らにはきつと響かない。行きつくところまで行きついて、そこで彼ら自身が気付かなければ、彼らがそのことに真正面から向き合うことは決してないだろう。

お察しの通り、その二人が、水谷桂とユキなのである。

彼らは薫のもとを度々訪れた。ユキは相変わらずきれいな身体のまま、後ろにはいつも水谷がついている。最初こそ腹が立ったものだが、次第に薫はこの二人がやってくるのを心待ちにするようになっていた。口ではどう言おうと、なんとなく彼らの間には、ほかの患者と研究者にはない温かい血が通っているように見えたからだ。水谷はユキの体調管理に殊更気を配っていて、他の研究者がよくやる、薬品の効能の最大限度を測るような、いかにも人体実験といった危険なことをしなかった。ユキも水谷に怯えるそぶりを全く見せず、いつも大人しく手を引かれて薫のもとへやってきた。今になって思うのだが、恐らく自分はそのとき、水谷に期待していたのだ。彼の良心が、この少女に手を加えることを躊躇わせているのではないかと。それは希望の光でもあった。地獄に伸びた一本の蜘蛛の糸だった。

しかしやはり、結末はあのお伽噺の通りだった。糸は薫の全く予期しなかったタイミングであっけなく切れた。それは出会っておよそ半年後のある朝のことだった。

その日、周りがやけに騒がしいのが気になって、お手伝いの若い看護師の女の子に聞いてみた。彼女は頬に手を当てて、私も詳しくは分からないんですけど、と前置きした後でこう言った。

「よくここに来てた、女の子と若い先生がいたじゃないですか。あの先生が実験に成功したんだそうですよ。女の子の背中に大きな鳥の翼をくっつけたんだとか。カメラマウス？っていろいろのがあるらしいんですけど、その応用みたいなものなんだそうです。」

彼女の言葉を聞いて、目の前が真っ暗になった。血が滞ったように指先が冷え、かじかむような錯覚を覚えた。彼らの関係性には、ちゃんと血が通っていると思っていたのに。そう思っていたからこそその冷たさを、あの子の自分は突きつけられたのだ。今になってそれがよく分かる。自分は性懲りもなく、また同じ冷たさを身をもって味わうことになってしまった。

例の実験後の彼女を見て、薫は、たまらなく悲しくなった。改造人間だとか、異形だとか、そんな言葉ではあの子のユキの姿を表現することはできない。純粋に、ただた

だ美しかったのだ。こんなに美しい被験者を見るのは初めてのことだった。筋肉が翼に連動し、パタパタと器用に羽ばたいてみせる。その様子は見るものに天使を連想させるだろう。

彼女が翼を手にした直後、水谷は功績を認められて教授となった。研究室と様々な特権を与えられた彼を、人々は天才と呼んでもてはやす。それが強烈な皮肉となって、薫の記憶に焼き付いている。

ユキに付き添う水谷のまなざしを、あのあと一度だけ、まじまじと見たことがある。以前と変わらない冷静なまなざし。その奥にあった確かな熱っぽい色を、薫は目にしたのだ。なんだか見てはいけないもののように思えて、以来彼の目を見据える勇気がない。

あれからも五年の月日が経った。今度は水谷が助手を持つようになり、柏木がユキの世話を焼いている。柏木の真心は本物だ。水谷がそういう助手を選ぶ目を持っていたことだけが、唯一の慰めだろう。そんな柏木の影響もあってか、ユキも次第に感情を表に出すようになった。薫のことを橘さんと呼び、柏木のことを柏木くんと呼び、水谷のことを先生と呼んで、まれに彼女のほうからもアクションを起こす。ときどき、微笑に笑うこともある。彼女を取り巻く諸々のことが、少しずつ好転していった、その矢先。今回の事件が起こった。

水谷は別の研究機関からの依頼を受けて、ユキを手放してしまったのだ。

彼女には様々なプレミアがついている。この研究機関のことをどんなに極秘としたところで、必ず誰かが口を滑らせ、それは目ざとく嗅ぎ付けられる。莫大な契約金を差し出してでも、「人間のキメラ」を手に入れた技術者は、残念なことに掃いて捨てるほどいるようだった。そんな連中の中の一つに、あるうことか、彼はユキを提供する確約をしてしまったのだ。薫と柏木が彼を非難したのは言うまでもない。連中は実験に成功したレアケースを手に入れたのであって、それが何を意味するのか、研究者である水谷が分からないわけではない。様々な拷問のような検証をして、挙句の果てには解剖されてしまうのだ。水谷が差し出したのは、ユキの命そのものだ。

けれども、彼は眉をひそめて怪訝そうな顔をしただけだった。「ちゃんど剥製になって返ってくるじゃないか。こっちはその剥製を所有する権利を持つてるんだ。それは相手方が特に欲しかった権利のはずだろ。相手にもこちらにも、そんなにメリットデメリットの差はないよ。」

その言葉を聞き終わるのを待たずに、薫は彼を殴った。涙が頬を伝い流れ落ちた。彼女を抑えようとした柏木の声もまた震えていた。あとき腹が立っていたのか、悲しかったのか、それとも虚しかったのか、ほとぼしる感情がどこに向かっているのかも分からなかった。ただ彼を傷つきたい衝動だけがはっきりしていて、大して強くもないこぶしを何度も水谷にぶつけた。彼はというと、黙ってそれを受けていた。

自分の身を庇うこともせず、甘んじてそれを受け止めていた。彼はこうされることを望んでいるのかもしれない。それに気付いたとき、無性に泣けた。

がらんとした電車の中で、二人は言葉数少なく時間を潰していた。ボックス席の窓際にお互いが座り、そろって窓の外を見る。と言っても、夜なので車内の映り込みしか見えないが。薫はひたすらみつともない表情をした自分の顔を睨みつけていた。

「橘さん」

不意にユキが話しかけてきて、慌てて表情を取り繕う。ユキは薫のバッグを指して、「電話が鳴ってます」と言った。

ディスプレイに表示された名前を見て、嫌悪にも似た苛立ちを感じる。

「無視しましょ。こんなやつとは早く縁を切ったほうがいいわ。」

しかし、彼女は困ったように笑って「出てあげてください」と頼むのだった。

「きつと橘さんに謝りたいんですよ。」

本当は無視したかったのだけれど、彼女が頼むので、薫は渋々電話に出た。彼が今更何を言おうというのだろう。想像することさえ腹立たしかった。

「はい、もしもし。」

「…もしもし。橘さん、怒ってますね。」

電話越しの彼の声は、普段通りの何気ない調子だった。こんな状況ですら、しおらしい態度の一つも取ろうとしない。つくづく忌々しい男である。

「怒ってなんかいいわ。失望したのよ。」

「そうだろうって、散々柏木にも言われました。」

「ああそう、やっぱりあの子の差し金なのね。それでどうしたの？今更何を電話で言い訳しようというのかしら。」

そこで一拍の間ができる。彼は言いづらいことを言おうとするとき、必ず僅かに間を置く癖があった。

「…そいつを、頼みます。」

薫は水谷の返事を鼻で笑う。

「それは何に対する念押し？しっかり届けて自分の口座にきちんとお金を振り込めってこと？神経を疑うわ。」

薫が強い言葉で畳みかけると、電話の向こうの声は「違います」と確かに言った。そのあと、やはり僅かに間ができる。その間が動揺からくるものであることは、なんとなく薫にもわかる。彼の動揺は、どちらかというと、彼自身に対するものであるらしかった。

「そうじゃないです。えっと、…そいつ、寂しいかもしれないから。電車の中だけでも、何か話しかけてやってください。」

薫は目の前のユキを見やった。ユキは辛辣な会話をする薫を見ながらわずかに不安げな顔をしている。「先生」が責められているのが心配なのだろう。自分の命を売った男を案じているのだ。なんだかたまらなくなつて、思わず目を閉じた。何という二人だ。彼らは本当に、いじらしくて哀れだ。

「…いい？そういうのはね、本人に言ってやんなさい。私に頼むのはお門違いよ。」

そういうと、電話をユキに渡して、薫は目を閉じたまま腕を組んだ。ユキが何か言っても、応じない態度を崩さない。やがて戸惑いながらも、ユキが電話に出たのが分かった。肩の力を抜いて、薫はようやく目を開ける。

何を言っても変えられなかった。今の彼にも、薫の言葉は届くまい。もしも届くとするならば、それは彼女の言葉をおいて他にない。それなら、自分にできるのは、そのチャンスを与えてあげることだ。

これで三度目。正真正銘、これが最後の恩情だ。

\*

「はい、代わりました。」

薫の電話に耳を当てると、水谷の声が聞こえた。

「…や。橘さん、怒ってるんだね。」

「悲しんでいるんです。」

そうか、という返事のあと、しばらく会話が途切れる。ユキはこういう時、何を言えいいのか分からなかった。対する水谷の方も、長い間言葉を探しているような気配がした。

「…今、どう？寂しくない？」

「はい。橘さんがいるので。」

そうか。水谷の返事はいつも短い。薫や柏木と違って、何だか冷たいような声色なのだ。

ユキはずいぶん経って、彼が冷たいのではなく、単純に、言葉に気持ちを乗せることが得意ではないのだと気づいた。

「先生はどうですか。寂しくないですか。」

「…うん。仕事ばかりしているよ。」

「柏木くんとはうまくいってますか。柏木くんが、先生のことを分からない人だと言って悩んでましたけど。」

「どうだろうね。俺もあいつのことはよくわからないんだ。今もふてくされてそこで寝てるよ。」

ユキは柏木の顔を思い浮かべた。背の高い彼は、話をするとき、ずっと腰を折って前かがみになっていた。いつも眉尻を下げていて、それは優しげな弧を描くのだ。

「…仲良くしてください。先生はまともな人だから、きっと苦しいんだって。前に、柏木くんが言っていました。先生はまともな人だから、きつと苦しいんだって。苦しいのに、自分の首を絞めるようなことばかりするのが心配だって。」

「…俺はまともじゃないよ。君を金で売るような奴だよ。おまけに橘さんからも愛想を尽かされそうだ。」

「そんなこと…。先生は私の恩人です。優しい人です。柏木くんの言った通りに、先生は本当は苦しいのではないですか？」

私を見るのが辛いのではないですか？」

電話からは息をのむ声だけが聞こえ、水谷が黙ったまま向こう側にいるのが感じられ

た。言葉を読まない方が、水谷の気持ちに近づけると知ったのは、ユキが翼をつけられて暫くたった頃だった。あのころから、彼の言葉は人に届きにくくなり、代わりに仕草が気持ちを語るようになった。背中を丸めて下を向いて、獣や草木に隠れるようにして。傷つき怯え拒絶して、それでも優しい人だから、苦しんだ末にぶっきらぼうになっていく。柏木も薫も、そんな彼のことを分かつらうとしていた。一緒に悲しもうとしていた。少なくとも、ユキにはそう見えた。

いろいろな人が、水谷についてさまざまな意見を口にしている。疎いユキでも、それはときどき耳に入ってくる。けれど彼女にはどれもピンとこなかった。しかし柏木や薫になら、この気持ちを分かってももらえるだろう。その確信だけは、彼女はしっかり持っていた。

ユキには分かっていた。彼女がこの五年間、水谷のそばで、真綿に包まれるようにして生活していたことを。それを難しい言葉で何とこのかは知らなかったけれど。それでもたった一つだけ、彼女が言えることがある。私を生かしていたのは、ひとえに先生の優しさだったということ。

誰が何と言おうと、その事実が変わることがないのだ。

\*

彼女とこんなに長く言葉を交わすのは、これが初めてかもしれない。自分も彼女も、いつになく饒舌だった。普段なら目の前の相手に気圧されて言葉にならなかつたものが、距離の隔たりのおかげで、ちゃんとした形を伴って相手に届けられていく。

それがひどく恐ろしい。自分が何を口走ってしまうのか見当もつかない。もう何もかも手遅れで、自分ではどうすることもできないと分かりきっていたから、安心して電話を掛けたのに。抑えていたものを自覚してしまつたら、それを彼女に伝えてしまつたら、俺は自分自身を殺さなければならぬのに。

俺は耐えられなかつたのだ。

自分のしでかしたことの責任を取らなければならないことが、心底嫌だった。

生き物を生み出すのは至上の喜びであり快樂だった。職権を乱用した道楽と言ってもいい。彼女に翼をつけたときには感動すら覚えた。美しい生き物を生み出したという、その事実に、手が震えるほどの興奮を覚えたのだ。

なんて浅ましいことだろうと思った。

美しいと思う自分の心が何よりも醜い。喜びを覚えずにはいられないことが何よりも愚かしい。人々の言葉はそう言っている。お前は恩恵ばかりを享受して、罪や責任を抱えることから逃げているのだと。

全くその通り。俺は逃げている。学生だったあの時から何ら変わっていない。生き物を殺さないのではない。殺せなかつたのだ。自分の手が汚れてしまうのが怖かつたのだ。

しかし、俺は頑なにそれらから逃げていたつもりで、実は初めから捕えられてしまつ

ていたのかもしれない。殺さずに獣たちを困い続けることを償いとしても、それで救われるのは人間の心だけなのだから。

かつて師事していた教授には、こうなることが分かっていたのだろう。俺が償い続けることで目をそらし、やがて耐えられなくなってしまう日がやってくることを。彼は俺に延命措置を施したのだ。彼は俺を哀れと思ったのだろう。延命措置を施しておきながら、俺の手から彼女を取り上げることはできなかった。それはあきらめだったのだろうか。彼なりの優しさだったのだろうか。今となっては分からないが、恐らく彼は、俺の味方であろうとしてくれたのだ。師であろうとしてくれたのだ。

しかしその限界がここに来て、とうとうやってきたようだ。

俺は自分のこれまでの過ちに気付いてしまった。彼女も、その内心を察してしまった。求められるがままに契約書にサインして、罪の責任を都合よく擦りつけたこと。なぜなら俺は殺せない。彼女を殺す未来を、片時でも想像してたくない。翼を付けた自分を、それを羽ばたかせて微笑む彼女の存在を、誰からも否定されたくない。翼を付けた自分を、

「…俺は苦しいよ。なあ、どうすればいいかな。どうすれば君を助けられるのかな。」

およそ自分のものとは思えない、情けない声がついて出た。言葉尻が震えるのを、どうしても抑えることができない。

電話越しに、彼女の微笑む吐息が聞こえる。

「先生がそう仰るなら、私は先生の所にいます。」

あっ、と言って、彼女の声が遠のいた。代わりに聞こえてきたのは薫の声である。

「聞いたわ、途中から、ずっと聞いてたわ。」

あんたね、そういうことはもっと早くに言いなさい。何を情けない声出してるの。」

すみませんと謝りながら、今までの会話を聞かれていたことに恥ずかしくなった。

「でももう手遅れなんでしょう。それを知ってたから電話かけたのに。」

薫は電話越しでも大袈裟と分かるため息をつく。

「そりゃあね、あんたが契約した時点でもう手遅れよ。今手を引けば、連中はこのことを放っておかないわ。私たちは、たぶんきつと、世間から大きなバッシングを受けるでしょう。でもそれも仕方ないことだわ。私たちは本当に、そうされるだけのことをしていたのだから。」

いいわね、これは責任よ。私たちが等しく背負うべき責任なの。私も片棒担いであげることから、ちゃんと前向いて受け止めなさい。」

そう言って、乱暴に電話が切れた。死刑執行人にしては思いのほか威勢の良い死刑宣告だ。

慌てて退出届を書き、柏木を起こそうと仮眠室のカーテンを開けると、予想外の光景にぎよっと目を見開く。

柏木は薄い布団の上に胡坐をかいて、男泣きに泣いていたのだった。

「なんだお前、起きていたのか。電話聞いた？」

柏木は鼻をぐずぐず鳴らして言った。

「ずっと聞いてました。良かった、先生良かったです。もうほんと遅すぎますけど、僕はこれで先生に失望しなくて済みます。」

「橘さんと同じこと言うよな、お前。」

とにかく行くぞ、と言って、退出届を見せると、柏木はそれをじっと見つめ、赤くなつた目をしばたかせながら笑った。

「先生もやっぱり僕とおんなじだ。字、グチャグチャですね。」

確認してみれば、確かに。殴り書きのように切羽詰まった文字が羅列していた。頭を搔いてごまかしても、たぶんもう遅い。彼の幼い笑顔を腹立たしく思いながらも、少しだけ、距離の隔たりがなくなったように感じた。

知らないうちに歩み寄っていたのは、自分の方だった。

\*

「先生。聞いてみたかったことが一つあります。」

「なんだ、さっさと言ってくれ。」

「どうして、翼を付けようと思ったんですか？ずっと気になってたんです。」

「そんなことか。…笑うなよ。」

俺は、あの子をかわいそうだと思ったんだ。逃がしてやりたいと思ったんだ。翼があったらさ、どこにでも飛んでいけるだろ。だからさ。…おい、笑うなって言ったら。」

「すみません。じゃ、最後に一つだけ。」

「なんだ。」

「いつになったら、あの子をユキって呼んであげるんですか。きっと待ってると思いますよ。先生がそう言ってくれるの。」

「…うん。これから、そう呼べるように頑張るよ。」

\*

最終便に乗っていた乗客が二人、途中下車をした。

一人は電話で何かを話し、一人は空を見上げている。

スモッグで霞んだ夜空にも、見えずとも、星は瞬いている。けれども本当はずっと、

まばゆいほどの星空が見てみたかった。いつかそういう場所に行きたい。みんなであの人と。あの人ならきつと連れて行ってくれる。

心のどこかで、ずっとそんな気がしていた。

本当は優しい人なのだ。不器用だけれども、愛すべき人なのだ。

「あなたがそう言わなくても、私はあなたのそばにいたいと、初めからそう思っていたんですよ。」

誰に聞こえることもない言葉が、白い息とともに空へと昇って消えていく。

このどうしようもない気持ちは何と言うのだろう。答えは出ない。ただ、涙ばかりが溢れて止まらないのだ。肩を抱き寄せてくれる、よく馴染んだその手は、かじかんでいるはずなのに、とても温かい。それでよけい泣けてしまうなんて、おかしいことだろうか。

あなたはきっとぶっきらぼうなことを言うだろうけれど、その目がいつも優しい色をしていることを、私は誰よりも知っている。

それは寒い、冬の夜のことだった。